The Oral Proclamation of Go-Shirakawa of Hōgen 1 (1156), Intercalary 9th Month 8th Day (KW08-Shiryō 3, Go-Shirakawa Senmyō)

FINAL FINAL

Source:
保元元年閏九月八日後白河天皇宣命（石清水文書[1]）
Dainihon komonjo Iwashimizu[2] *monjo* Vol. 1, 30-1.
Iwashimizu monjo. Heian ibun #2848, Vol. 6, p. 2349

Michelle Damian
Nan Ma Hartmann
Sachiko Kawai
Laura Nuffer
Dan Sherer
Kevin Wilson
January 17, 2009

原文

保元元年閏九月八日後白河天皇宣命（石清水文書）
（前略）前左大臣藤原頼長朝臣、偏巧暴悪美、妄図逆節弖、太上天皇乎奏勧弖、天下乎擾乱志、国家乎謀危之由、云云之説嗷々多端志、然間去七月九日夜、太上天皇、偸出城南之離宮弖、忽幸洛東之旧院弖、占戦場於其処女、結軍陣於其中弖、頼長朝臣度、成狼戻之群弖、企梟悪之謀、因茲弖同十一日、為禦凶徒爾差遣官軍須、而依宗廟之鎮護利、蒙社稷之冥助弖、謀反之輩即以退散志奴、頼長朝臣波中流矢弖終其命爾岐、是則神之所誅奈利、寔非人之所為須、廿三日爾太上天皇乎波讃岐国爾奉遷送留、其外党類或仰刑官弖召捕倍、或帰王化志弖来服須、即令明法博士等勘申所当罪名爾拠無首徒律、各可処斬刑之由乎奏世利、然而殊仁有所念、右近衛大将藤原兼長朝臣以下十三人乎波、一等減弖遠流罪爾治賜布、合戦之輩、散位平朝臣忠貞以下二十人乎波、考古跡於弘仁倍、訪時議於群卿弖、且法律能任爾処斬罪世利、夫法令馭俗之始奈利、刑罰波懲悪之基奈利、若寄重爾依弖優志、職高加為爾宥波、中夏乎毛難治久、後昆乎毛難懲加良牟、是為眇身爾不行須、唯

[1]京都府八幡市八幡に鎮座する石清水八幡宮に伝存する、田中家・菊大路（善法寺）家両所伝文書を中心とする、平安時代から江戸時代末期に及ぶ膨大な古文書・古記録。

[2] 石清水八幡宮 Iwashimizu Hachiman Shrine: Located near present-day Otokoyama-mine in Hachiman City, Kyōto Prefecture. Also called Iwashimizu Hachiman Gūji. The shrine flourished in the days of royal processions to it by Shirakawa Tennō and Toba Tennō, it was a venue for the worship of Hachiman as the guardian deity of the Minamoto clan and the court. After its construction royal accession ceremonies were performed there; and in the case of unusual events, royal messengers were dispatched to offer prayers while the *tennō* joined in those prayers from his own residence at the Seiryōden. (*Heian jidaishi jiten*, digital version).

This document is written in semyōtai, the special language of oral royal proclamations.

国家爾無私良牟止奈利、即可告申此由之処爾、依憚穢気弖、于今延怠世利、故是以吉日良辰乎択定弖、参議従三位源朝臣師仲・散位従五位下源朝臣経時等乎差使弖、礼代乃大幣乎令捧持奉出賜布、即令明法博士等勘申所当罪名爾拠無首従律、各可処斬刑之由乎奏世利、然而殊仁有所念、右近衛大将藤原兼長朝臣以下十三人乎波、一等減弖遠流罪爾治賜布、合戦之輩、散位平朝臣忠貞以下二十人乎波、考古跡於弘仁倍、訪時議於群卿弖、且法律能任爾処斬罪世利、夫法令馭俗之始奈利、刑罰波懲悪之基奈利、若寄重爾依弖優志、職高加為爾宥波、中夏乎毛難治久、後昆乎毛難懲加良牟、是為眇身爾不行須、唯国家爾無私良牟止奈利、

読み下し

保元元年閏九月八日後白河天皇宣命（石清水文書）[3]

前の左大臣藤原の頼長朝臣[4]、偏えに暴悪（ぼうあく）を巧（たく）み、妄（みだ）りに逆節[5]を図りて、太上天皇[崇徳][6]を勧め奏して（奉りて）、天下を擾乱（じょうらん）し、国家を謀危するの由、云云の説　嗷々（ごうごう）[7]端（はし）多し。然る間去る七月九日の夜、太上天皇、偸（ひそかに）城南の離宮[8]を出でて、忽（たちまちに）洛東の旧院[9]に幸して、戦場を其の処に占め、軍陣を其の中に結びて、頼長朝臣と、狼戻（ろうれい）[10]の群を成して、梟悪（きょう

---

[3] 石清水八幡宮：現在の京都府八幡市男山峰に鎮座。石清水八幡宮寺とも。このころ源氏の頼信は八幡神を祖神として崇拝。創建以来、天皇即位の際には必ず奉幣され、異変にあたっても必ず勅使祈願があり、更に天皇も清涼殿で拝した。『平安時代史事典』(CDROM 版)

[4] 藤原頼長朝臣（ふじわらのよりながあそん 1120-1156）： 関白忠実(ただざね)の二男であり、幼名は菖蒲若。正室は藤原実能の娘・幸子。17 歳で内大臣になり、1149 に左大臣に進む。1156 年、近衛天皇崩御のすぐあと、崇徳上皇の下で兵を挙げ、保元の乱を扇動する。 だが、反乱はすぐ鎮められ、頼長は重傷を負い、37 歳で亡くなる。

[5] 逆節：忠順でない操守。反逆の志行。

[6] 崇徳天皇 (1119-1164)：名前は顕仁。鳥羽天皇の第１皇子。母は藤原公実の女、待賢門院。1123 即位し、1141 近衛天皇に位を譲って、上皇になった。1155,近衛天皇の死後、自分の皇子を進めたが、弟の後白河天皇が即位した。それに応じて、鳥羽法皇の死後、源為義、摂関家氏長の藤原頼長とともに兵を挙げて、保元の乱起こした。敗北して、讃岐の国に流して、そこに亡くなった。

[7] 嗷々：がやがやと大声で騒ぐさま。

[8] 城南の離宮：「鳥羽殿」・「鳥羽の離宮」ともいわれる。京都の南に、鳥羽一帯に十一世紀末白川天皇が退位後の後院として造営した離宮。現在京都市南区上鳥羽、伏見区竹田・中島・下鳥羽一帯に至る。『日本歴史地名大系２７：京都市の地名』p. 431

[9] 旧院：白河前斎院御所。母妹の統子内親王の屋敷に入り、さらに白河北殿に入った。『保元の乱・平治の乱』河内祥輔。　吉川弘文館. 2002. pp. 65-66（統子内親王は、1126－1189 年。）白河北殿は、白河法皇によって造営された院御所のうち、南側の南殿に対し北側の御所。現在左京区聖護院川原町・丸田町・東竹屋町・聖護院東寺領町一帯。（『日本歴史地名大系２７：京都市の地名』p. 173）

[10] 狼戻：狼のように、心がねじけて道理をもとること。それとも、乱れ散らばなること。

あく）[11]の謀（はかりごと）を企つ。茲（ここ）に因（よ）りて同十一日、凶徒を禦（ふせ）がんが為に官軍を差し遣す。而（しこうして）宗廟（そうびょう）[12]の鎮護により、社稷[13]の冥助[14]を蒙りて、謀反の輩即ち以て退散しぬ。頼長朝臣は流矢に中りて其の命を終えにき。是則ち神の誅するところなり。寔（まことに）人の所為に非ず、廿三日に太上天皇をば讃岐の国に遷送し奉まつる。其の外の党類　或いは刑官[15]に仰せて、召し捕へ。或いは王化に帰して来服す。即ち此の由を告げ申すべきの処に、穢気[16]を憚かるによって、今に延怠せり。故に是（ここ）を以って吉日良辰（きちじつりょうしん）[17]を択定して、参議従三位源朝臣師仲・散位従五位下源朝臣経時等を使に差て、礼代[18]（いやしろ）の大幣[19]を捧げ持たしめ出だし奉（たてまつ）り賜ふ、即ち[20]明法博士（みょうほうはかせ・みょうぼうはかせ）[21]等をして所当の[22]罪名を勘申（かんがえもうさ）[23]しむるに、首従無きの律に拠り[24]、各（おのおの）斬刑（ざんけ

---

[11] 梟悪：暴虐なこと・人。フクロウは悪鳥からいう。
[12] 宗廟：【1】先祖の霊を祭った場所。【2】(とくに皇室の祖先の霊廟の意から)伊勢大神宮の称。また、賀茂神社・石清水八幡神宮をもいう。【3】(2)から転じて、皇室。皇室に治められた国。
[13] 社稷：中国で祀られた国を守る土地の神『社』と五穀の神『稷』。国家の尊崇する心霊、又は国家そのもの。
[14] 冥助：神仏の助け。冥加(みょうが)。
[15] 刑官：刑吏。ここでは検非違使をさすと考えられる。
[16] 穢（けがれ）：この場合は、合戦の死傷者・火災による、荒廃を原因とする。
[17] 日がらのよい日。
[18] 礼代（いやしろ）：相手への礼儀、敬意を表わすしるしとして賜わる物。
[19] 大幣 (おおぬさ)：「大麻」とも記す。祓（はら）えのときに用いる大串につける幣帛（へいはく）。祓えのあと、人々がこれを引き寄せてからだを撫で、罪やけがれをそれに移したという。
[20] 即ち：１）ある動作の終わったその時。途端。過去のある時をさす。その時。当時。２) 前の事柄を受け、その結果として後の事柄が起こることを示す。文中にあっては、「…ば、すなわち」と条件句を受ける形で用いられることもある。そこで。そうなると。それゆえ。前の事柄を受け、後の事柄を言い出す時に軽く添える。さて。ここに。そして。前の事柄に対し、後の事柄で説明や言い換えをすることを示す。つまり。いいかえると。ということは。３）即座に。すぐに。その所、または、その時にちょうどあたって。まさに。
ここでは、２）の意をとり、「そこで」と訳した。
[21] 明法博士：大学寮の明法課程の教官。また、大宰府に博士と並んで置かれた教官。
[22] 所当：相当すること。適当なこと。当を得ていること。
[23] 勘申：平安以降、朝廷で儀式などに必要な先例や典故を調べたり、行事の日時などを占い定めたりして報告すること。勘進（かんしん）。
[24] 「賊盗律巻七　謀反條」参照：
凡謀反及大逆者、皆斬。〈（割注）人君者与天地、合徳（中略）言皆者、罪無首従、〉
（読み下し）
凡そ謀反及び大逆せらば、皆斬れ。〈（割り注）人の君は天地と徳をかなえ、（中略）皆という

い）[25]に処すべきの由を奏せり。然（しか）れども、殊に念ずるところあり、右近衛[26]の大将藤原兼長朝臣[27]以下十三人をば、一等を減じて遠流[28]の罪に治め賜ふ。合戦[29]の輩、散位（さんい）[30]平朝臣忠貞以下二十人をば、古跡[31]を弘仁[32]に考へ、時議[33]を群卿（ぐんけい）[34]に訪いて[35]、且（かつがつ）法律の任（まま）に斬罪に処せり。夫（それ）法令は馭俗（ぎょぞく）[36]の始なり。刑罰は懲悪[37]の基なり。若（もし）寄せ重きに依りて優じ、職高きが為に宥（なだ）む[38]れば、中夏（ちゅうか）[39]をも

は、罪は首従（しゅじゅう）なきことなり、〉

[25] 斬首の刑罰。斬罪。（新訂増補国史大系 『律令義解』第二十二巻 「律巻第七：賊盗律第七 」p. 55）

[26] 右近衛：右近衛府に同じ。

右近衛府：令外（りょうげ）の官。禁中の警固、行幸の警備などに当たった朝廷の常備軍の一つ。神亀 5 年（728）設置の中衛府（ちゅうえふ）が大同二年（807）に改称されたもの。平安中期以後になると儀仗兵の役割を果たした。職員に長官である大将以下、中将、少将、将監、将曹、医師、番長、府生のほか近衛 400 人などがある。右近。右近の司（つかさ）。右近衛。右近衛の司。右近府。みぎのちかきまもりのつかさ。

[27] 藤原兼長（1138□1158）：平安時代後期の公卿。保延 4 年生まれ。藤原頼長と源師俊の娘の息。仁平 3 年(1153)に参議に、同年権中納言となり、翌年右近衛大将を兼任。正二位。保元の乱に際して父に連座、出雲に流された。配所で保元 3 年 1 月死去。21 歳。家系図参照。

[28] 遠流：律令制に定める流罪のうち最も重いもの。中流（ちゅうる）、近流（こんる）に比べて京からの距離が遠い。延喜式では伊豆、安房、常陸、佐渡、隠岐、土佐等の国がその地とされているが、必ずしもこの六国に限られていなかった。

[29] 合戦：保元の乱を指す。

[30] 散位：令制において、位階だけがあって、官職のないこと。また、その人。また、三位以上であって、摂関、大臣、大・中納言、参議のどの職にもないものをさす場合もある。散官。散班（さんぱん）。

[31] 古跡：歴史上の遺跡。旧跡。ここでは、先例の意味。

[32] 弘仁：嵯峨・淳和天皇朝の年号（810～824）。

弘仁格：701 年（大宝 1）から 819 年（弘仁 10）までの格を集めたもの。10 巻。平城天の時代、藤原内麻呂・菅野真道らに勅して撰定させ、のち嵯峨天皇の時、藤原冬嗣らに勅して続修させた。散逸していたが、近時「弘仁格抄」が発見された。

[33] 時議：その時、その場の情況、状態、条件に対応するその時の判断や処理の仕方。

[34] 群卿：多くの公卿（くぎょう）。

[35] 訪（と）う：質問する。

[36] 馭俗：習俗を治める。風習・生活様式の方向付をする。

[37] 懲悪：悪をこらしめること。

[38] 宥む：１）罪あるいは罪人を、穏やかに取り扱う。寛大な取り扱いをする。許す。２）ある人の行為について、それを憤慨している他の人の心を穏やかにするように計らう。とりなす。調停する。３）人の心・精神状態などを穏やかな状態にする。和らげる。静める。４）物事を、和らげて整える。

[39] 中夏：１）国の中央。都。京師（けいし）。また、自国の誇称。２）中華に同じ。

治め難く、後昆（こうこん）[40]をも懲らしめ難からむ。是眇身（びょうしん）[41]の為に行わず。唯（ただに）国家に私なからむとなり。

現代日本語訳

前の左大臣であった藤原頼長朝臣は、悪事のみを行なって、世の中を乱そうとして、太上天皇{崇徳}をそそのかして、世の中をかき乱して、国家を危くするということについて、さまざまな噂がさわがしく色々と飛びかっている。そうしたところ、去七月の九日の夜に、太上天皇がひそかに城南の離宮を出て、とつぜん洛東の旧院{白河殿}に御幸して、そこを決戦の場に決め、そこに武士を集め、頼長朝臣とともに狼の群れのようになり、凶悪な謀を企てた。これに対抗して、同じく十一日[後白河が]凶徒を防ぐために、天皇の軍隊を遣わした。そうした所、対抗して、[後白河]　祖先の霊廟である岩清水八幡宮の御加護によって、国を守る土地の神により、謀反の輩は破れ散ってしまった。頼長朝臣は流れ矢にあたって、その生命を終えた。これは神の咎めである。まことに、この事は人のなした事ではない、廿三日に太上天皇を讃岐の国に配流した。その他の仲間達は、或る者は刑束に言って召し捕えさせ、又、或る者は[自ら]天皇の徳に従って、服従した。そこで、以上のことを（石清水八幡宮に、後白河天皇が）申し上げねばならなかったのですが、（合戦による）穢を憚りまして、今まで遅れたような訳です。いまここによい日柄（である今日）を選んで、参議従三位源朝臣師仲[42]と、散位従五位下源朝臣経時を使として、（彼らに石清水八幡宮への）感謝の贈り物である大幣を持たせ、派遣いたしました。　そこで明法博士達に命じて、相当の罪を検討報告させたところ、「主犯・従犯は区別しない」という律の規定に従って、みな斬刑にすべきであると奏上してきた。しかし、特に［後白河天皇が］減刑を願う気持ちがあって、右近衛の大将藤原兼長朝臣以下十三人を、[一等から]一つ格

[40] 後昆：「昆」も「後（のち）」の意。１）後世。また、後々の人。２）子孫。後裔。
[41] 眇身：小さい体。また、天子が自分をへりくだっていう時に用いる語。眇躯。
[42] 源師仲 (みなもとのもろなか―１１１５－１１７２) 平安後期の公卿。伏見中納言と号する。村上源氏に属し、権中納言師時の三男。母は待賢門院の女房で中宮大夫源師忠女。長承元年（１１３２）正月叙爵、次いで侍従。以後、権左少将、権右中将等を経て、保元元年（１１５６）二月に後白河天皇の蔵人頭となり、更に同年四月、正四位下参議に任せられて公卿に列した。

を落として、遠流の罪に赦してやることとなった。平朝臣忠貞[43]以下[保元の乱の]二十人の武士の処分については、弘仁の旧跡[44]にならい、または、今の状況に合わせた判断や処理の仕方を公卿達に検討させて、さしあたり、法律のままに斬罪に処することとなった。

そもそも法令は習俗を統治するための第一歩である。刑罰は悪を懲らしめることの根本である。もし、関係が深いからといってその者達を優遇したり、官職が高いことを理由に[高官の者を]寛大に処するならば、天下を治めることが困難となり、後世の者達に制裁を加えることも難しくなるであろう。これは、私自身のために行うのではない。そもそも、国家に私事はないのである。

英訳

The previous Minister of the Left, Lord Fujiwara no Yorinaga,[45] was single-mindedly dedicated to violence and, against all reason, he planned rebellion. He recommended violence against the throne to the retired *tennō* {Sutoku},[46] imperiled the court, and countless rumors about the [possible] danger were noised about.

Meanwhile at night on the ninth day of the past seventh month the retired *tennō*

---

[43] 平忠正を指す。平忠正の「正」が後白河天皇の名（雅仁）の「雅」と同じ音であるのを憚り、斬刑を執行する前に忠貞と改められたと考えられる。（漢文ワークショップ 2008 ディスカッション）

[44] 薬子の変を指す。平安初期の朝廷内部の政変。藤原薬子は平城天皇の妃の母として天皇のを受け、兄仲成と共に勢威を振ったが、大同 4 年（809）天皇が皇太弟嵯峨天皇に譲位すると、翌年薬子と仲成は平城上皇を再び位につけようと画策した。朝廷は坂上田村麻呂らに命じてこれを防止し、薬子は自殺し、仲成は誅され、上皇の子高岳親王は皇太子を廃され、かわって大伴親王が皇太弟に立てられた。ここでは、謀反の理由で死刑が行われたことを先例として挙げられている。

[45] 藤原頼長(Fujiwara no Yorinaga Ason 1120-1156): The second son of the regent Tadazane, his childhood name was Ayawaka. His wife was Sachiko, the daughter of Fujiwara no Saneyoshi. At the age of seventeen he became Inner Palace Minister, and in 1149 he became Minister of the Left. In 1156, soon after the death of Sutoku Tennō, he raised an army beneath the former sovereign Sutoku, inciting the Hōgen Rebellion. However, the rebellion was soon suppressed, and Yorinaga, having received heavy wounds, died at the age of 37.

[46] 崇徳天皇 (Sutoku Tennō 1119-1164): His name was Akihito. Oldest son of Toba Tennō. Mother was Taikenmonin, daughter of Fujiwara no Kin'zane. Ascended the throne in 1123, and retired to allow for the ascension of Konoe Tennō in 1141. After the death of Konoe Tennō in 1155, Sutoku put forward his son as a candidate for the throne, but instead his brother ascended the throne as Goshirakawa Tennō. In response to this, following the death of the retired sovereign Toba, he, along with Minamoto Tameyoshi and the oldest son of the Fujiwara regent's line, Yorinaga, raised an army and attempted to stage a coup, the Hōgen Revolt. Defeated, he was exiled to Sanuki Province, where he later died.

[Sutoku] secretly left the Seinan Detached Palace[47] and proceeded directly to the Rakutō cloister[48] [of the retired *tennō* Shirakawa]. He [Sutoku] designated it as the place of battle, mustered troops there, and joined together with Lord Yorinaga to form a vicious gang. So did they plot their dark evil schemes.

Thus on the eleventh day of the same month, to stop these plotters I dispatched official troops. As for protecting the ancestral hall of the *tennō* [Iwashimizu Shrine],[49] the army received the spiritual protection of the gods[50] and scattered the rebels. Lord Yorinaga was pierced by a flying arrow and his life came to an end. This was retribution from the gods. It was surely not an act of man. And on the twenty-third day the retired *tennō* [Sutoku] was banished to Sanuki Province. As for the others, I ordered the authorities to arrest them, or they were converted by the royal virtue and submitted to me. So, the aforementioned ordeal was supposed to be presented [to the Iwashimizu Hachimangū Shrine, by Retired Tennō Go-Shirakawa], but in order to avoid defilement[51] [from the recent fighting], it has been postponed until now. Now a favorable day is chosen and Advisor on the Council of State, Junior Third Rank, Minamoto Ason Moronaka[52] and Courtier-without-post[53], Junior Fifth Rank Lower, Minamoto Ason

---

[47] 城南の離宮(*Seinan no rikyū*): also known as Toba dono or Toba no rikyū. Located in southern Kyōto (present-day Kami Toba, Minami Ward and Takeda, Nakajima, and Shimo Toba in Fushimi Ward, Kyōto City), it was built in the late 11th century as a detatched palace for Shirakawa Tennō after he retired in the vicinity of Toba. *(Nihon rekishi chimei taikei* Vol. 27*: Kyōtoshi no chimei*. Heibonsha. 431)

[48] 落東の旧院(*Rakutō no kyūin*): Sutoku went to the residence of Muneko, princess of the blood (1126 – 1189), and then entered the Shirakawa Northern Cloister (from *Hōgen no ran/Heiji no ran*, by Kawauchi Shōsuke. Tokyo: Yoshikawa Kōbunkan. 2002. 65 – 66). The Shirakawa Northern Cloister (Shirakawa kitadono 白河北殿) was one of the palaces built by the retired *tennō* Shirakawa after he had taken priestly vows (1096); a northern palace to correspond to the Southern Palace in the south. Present-day location is in Sakyo-ku, Shōgoin-kawaharamachi/Marutamachi/Higashi-takeyamachi/ Shōgoin-Tōjiryō-machi (*Nihon rekishi chimei taikei* Vol. 27*: Kyōtoshi no chimei*. Tokyo: Heibonsha. 173)

[49] 宗廟(*sōbyō*): A place to commemorate the spirits of the ancestors—especially those of the royal family. While Ise Shrine was primary, Kamo and Iwashimizu shrines are also referred to as royal ancestral shrines.

[50] 社稷 (*shashoku*): The god of the earth (*sha*) and the god of the five grains (*shoku*), worshiped in China as the protectors of the country—thus, protector deities revered by the realm.

[51] 穢 (*kegare*): Defilement. Here it refers to the death, blood and injuries from the recent fighting.

[52] Minamoto no Moronaka (源師仲 1115-1172): A courtier from the late Heian Period, also called Fushimi Middle Counselor. He belonged to the Murakami Genji and was the third son of Provisional Middle Counselor [Minamoto no] Morotoki. His mother was lady-in-waiting to Kenshunmon'in, and daughter of Counselor to the Throne in the Queen's Household Agency Minamoto no Moronaka. He was invested in the 1st month of the 1st year of Chōshō (1132), and then became an attendant to the *tennō*. Later he passed through the posts of Provisional Junior Captain of the Inner Palace Guards and Provisional Middle Captain of the Inner Palace Guards, before becoming Head of the Royal Secretariat to Retired Tennō Go-Shirakawa in the 2nd month of the 1st year of Hōgen (1156). Then in the 4th month of the same year he was assigned to the post of Advisor on the Council of State, as a senior fourth rank lower, and joined the courtier ranks.

Tsunetoki[54] will act as royal messengers. They shall be dispatched [to the Iwashimizu Hachimangū Shrine], where they shall present silks of purification[55] as gifts of thanks. Doctors of law[56] were immediately ordered to research precedents and report[57] the appropriate named crimes. They memorialized to the throne that each one should be decapitated according to the penal code, which makes no distinction between leader and accomplices.[58] Nonetheless, based on [my] particularly strong desire for leniency, the punishment for Senior Captain of the Inner Palace Guards of the Right[59] Lord Fujiwara no Kanenaga[60] and his thirteen followers was reduced one full degree, [from execution] to distant exile.[61] As for the warriors, based on precedents from the Konin Era[62] and consultations on current suitable procedures with many senior nobles,[63] the courtier-without-post Lord Taira no Tadasada[64] and the twenty men-at-arms who joined him[65] were sentenced to death according to the law. This was the beginning of retributive law—punishment is the foundation of curbing evil. If [judgment] was to favor intimates and show lenience to those with high posts, it would be difficult to rule the realm[66] and

---

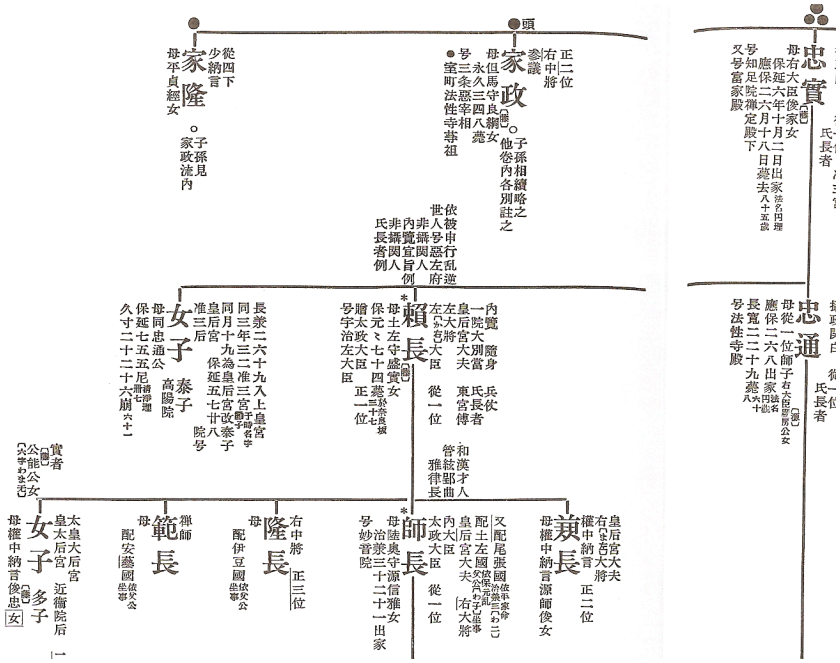
[53] 散位 (*sani*): The translation given for this term was taken from the Shiryo Hensanjo database, and was determined at a previous Kambun Workshop.
[54] No additional information could be found on this person.
[55] 大幣 (*ōnusa*, also 大麻 (*ōnusa*)) : A long pole that has silk strips hung from it and is used for purifying ceremonies. After the ceremony people take the silks and brush them on their body. Any sins and defilements will be transferred onto the silk.
[56] 明法博士 (*myōhō hakase*, *myōbō hakase*): Specialists in *ritsuryō* and royal law who taught in the royal university (*daigaku*) and advised the court government. When the court needed to determine crimes and administer punishment, it consulted the doctors of law to decide an appropriate sentence based on legal precedent. (For further information, see Carl Steenstrup, *A History of Law in Japan Until 1868*)
[57] 勘申 (*kanjin*, *kanshin*): A report requested from specialists concerning precedents for court rituals or other issues.
[58] 首従 (*shuju*): Here, 首 refers to the leader while 従 refers to accomplices.
[59]右近衛 (*ukonoe*): One of the Six Guards that made up the central military institutions of the Heian Period, it was established in 746 by Emperor Shōmu. (Karl F. Friday, *Hired Swords*)
[60] 藤原兼長: Fujiwara no Kanenaga (1138-1158) was a son of Fujiwara no Yorinaga; his mother was a daughter of Minamoto no Morotoshi. See the genealogy below.
[61] 遠流 (*onru*): The most severe punishment in the category of exile. Destinations are further from the capital than *chūru* (medium range) and *konru* (short range). In the era of Engi (901-923), the usual destinations were usually Izu, Awa, Hitachi, Sado, Oki, or Tosa.
[62] This refers to punishments after the Kusuko Rebellion in 810 and, in particular, the precedent of execution ordered at that time.
[63] 群卿 (*gunkei*): Senior nobles.
[64] There is a possibility that Tadasada's name was changed from Tadamasa (忠正) shortly before his execution to avoid phonetic similarities with Sovereign Go-Shirakawa's name, which was Masahito (雅仁).
[65] 合戦 (*kassen*): Battle, here referring to the Hōgen Rebellion.
[66] 中夏 (*chōka*): Capital, the center of the state.

admonish future generations.[67] [In all this] I do not act for myself.[68] Ultimately what is for the realm is not personal.

***

[67] 後昆 (*kōkon*): Later generations, descendents.
[68] 眇身 (*byōshin*): A humble euphemism used by the sovereign to refer to himself. Here 眇身 refers to Go-Shirakawa himself.

藤原兼長　家系図　（The family tree of Fujiwara no Kanenaga）



尊卑分脈第一編, p. 65